【 8 】

氏　　名	徳　永　誓　子（とく　ながせい　こ）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	文　博　第　229　号
学位授与の日付	平成14年11月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科歴史文化学専攻
学位論文題目	修験道成立過程の研究
論文調査委員	（主査）教授 勝山清次　教授 藤井譲治　助教授 吉川真司

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は，修験道成立過程の再検討を試みたものである。修験道の成立については，今日における修験道研究の第一人者，宮家準氏の見解が通説となっているが，1970年代に精力的に修験道研究を進めた五来重氏の説も依然として影響力を失っていない。いくらか食い違う部分があるものの，両氏の見解は，修験道には始源から一貫した本質が存在するとし，その体系化が平安中期から末期になされたとみなす点では共通している。しかし，両氏が想定する修験道の本質が近世以降の実態から導き出されている点，また平安時代末期にはまだ「修験道」という宗派が確認できない点など，通説にはいくつかの問題が残されている。

研究史をこのように整理したうえで，論者は，現在に残る修験道をもとに遡及的に古代・中世の現象を解釈する宮家・五来氏の視角に対し，古代・中世の政治・社会・文化との関係から修験道を捉える視角を提示し，修験道という顕密体制下の一宗派が成立する過程を考察する。具体的には，修験道を二つの側面から追究している。一つは，従来も取り上げられてきた山岳修行の展開である。その際，山岳をめぐる諸動向，たとえば修行者による中央と地方の往還などに着目している。今一つは呪術活動である。これが修験道の不可欠な属性であることは広く認識されているが，その展開を体系的に論じることは従来なされてこなかった。

新たな視角による具体的な考察を通じ，論者は，13世紀末を修験道成立の画期と捉え，通説が成立時期とみなしてきた平安時代末期をその前提が整った時期として位置づけなおしている。11世紀末に山伏の独自なあり方が顕在化し，それが約2世紀の間に体系化され，顕密体制下の一宗派として成立するが，こうした動きの中心となったのは，園城寺の高僧が補任される熊野三山検校と熊野の修行者との関係であった。また13世紀後半には，興福寺東西金堂衆を中心とする「当山」方という広域的な山伏の組織も形成されるが，この点も13世紀末を修験道の成立期とみなす根拠となりうるとしている。

第一章「修験道の成立」は，顕密体制の一翼を担う一宗派としての修験道の成立過程を追究したものである。通説では修験道は平安時代末期に成立したとされる。確かに当該期に思想・儀礼・組織などにおいて，修験道独自のものが形成され始めた事実は否定できないが，一つの宗派としての確立とは区別すべきである。このように通説を批判したうえで論者は，「修験」の意味の変化に注目し，それが一つの宗派として扱われる画期を13世紀末に求めている。これ以前，11世紀後半頃から修験道の体系化を促す言説が，開祖役小角と根本道場大峰を軸に進展していくが，これが熊野において山岳修行に国家的な意味を与えるようなものへと展開を遂げ，顕密体制の一翼を担う一宗派として「修験道」が確立するのである。

ついで論者は体系化の前提に目を向け，11世紀における山岳修行の飛躍的な発展に注目する。この時期の山岳修行者は地方と中央を頻繁に往来するようになったとみられるが，その動きは俗界における国司（受領）支配の展開と関連している。国司は都鄙間交通網の整備に大きく寄与する一方，地方山岳の信仰の伝播にも主導的役割を果たした。また10世紀後半以降，金峯山・熊野の間に位置する大峰における修行も活発になっていく。大峰は畿内最大の山岳地帯として山岳修行界の根本道場とみなされていたが，両端の金峯山と熊野の神格や宗教機構に拠らねば存立しえない存在でもあった。当初，主に金峯山

が大峰の開発を促す役割を果たしたが，11世紀半ばからの興福寺による末寺化によって勢力基盤が限定されていき，11世紀末以降山岳修行の中心地としての立場を熊野に譲ることになる。

熊野の発達は太平洋海運を通じた人的組織の形成，参詣路の宗教的整備などにもとづくものであり，それらは地理的条件を武器にしたものであった。この11世紀における展開を通じ，熊野は地方と中央の結節点としての内実を備え，寛治年間の宗教優遇政策の一環として挙行された白河院の第１回の参詣により，制度的な保証を得て中央諸権門に匹敵する権威と勢力をもつようになる。それは山岳修行界の一大中心地としての地位を固めたことを意味する。それにともない，熊野の権威に連なろうとする修行者が「熊野先達」を称し，勢力は一層拡大した。また永久年間以降，院の特別な信仰を受けるようになり，王権にとって特別な意味をもつ神格として，さらに権威が上昇していく。しかし，承久の乱はこうした熊野と王権との繋がりにも打撃を与えることになった。こうしたなかで，熊野の側から新たに王権との関係を再構築する努力がなされるが，その営みが山岳修行に王権擁護の意味を付与することになり，それが修験道の成立に結実したと捉える。

第二章「修験道成立の史的前提―験者の展開―」では，修験者の前身的存在とみなされてきた験者の特性を究明している。通説によれば，験者は修験者の前身的存在であり，彼らの活発な山岳修行が修験道の成立を促したとされる。平安～鎌倉時代の使用例を検討した論者は，こうした通説を否定し，験者とは山岳修行と験力を表裏一体の属性とする存在ではなく，呪を用いた治療である加持治療の能力を持つ者をさしていたことを明らかにしている。験者という語は10世紀半ばから用いられ始めるが，当該期は天台宗の主導により加持治療が活発な展開を見せた時期に相当するのである。

そのうえで論者は，験者の通説的理解において不可分とされていた山岳修行と験力の関係も一貫したものでなかったことを論証し，元来山岳修行を必須としていなかった験者にとって，それが験力を獲得するうえで不可欠のものとみなされるようになった時期こそ修験道の成立する画期と捉えるべきであると主張する。

第三章「熊野三山検校と修験道」は，熊野三山検校が修験の棟梁として確立する過程を論じたものである。熊野三山検校の選定条件は，第１に熊野などでの山岳修行に研鑽を積んでいることであるが，同時に院の意向も重視されており，師資相承は副次的な条件であった。この職が特定の門流によって相承されるようになるのは第３代検校覚宗以降である。覚宗は熊野本宮の山伏集団長床衆と修行を通じて関係を築き，次代検校覚讃の時にこの関係は制度的なものへ発展する。その後，新熊野社の設置なども加わり，検校に付随する権益は拡大するが，覚宗門流は有力門跡として発達するきっかけをもたず，また検校の相承も制度的に保証されたものでなかったため，その相承は断絶する可能性を内包していた。

三山検校の職務外の共通点は験者であることである。寺門派以外で初めて三山検校となった長厳の場合，その起用には後鳥羽院の母七条院の意向が強く働いていたが，両者の関係は後鳥羽の誕生時に長厳が験者として奉仕したことに端を発していた。他の検校も少なからず験者として院やその係累に奉仕しており，験者は王権を宗教的に守護するうえで独自の役割を担っていた。験者と山岳修行の関係は決して本来的なものでないが，山岳修行は呪術能力獲得手段としてしばしば行われ，それを重視する傾向は11世紀後半以降強まっていった。そして13世紀半ばには，寺門派の山岳修行者が貴族社会の験者をほぼ独占するに至る。

寺門派が三山検校を確保する13世紀半ば以降，派内において同職をめぐる争いが生じるが，覚宗の流れを汲む良尊が常住院門跡を世俗的・宗教的両面において確立させ，検校の師資相承を実現していく。一方，山門・真言においては，13世紀前半まで験者の門流を確立していく動きがみられたものの，山岳修行を必須条件とする認識が強まるなか，これらの門流は淘汰されてしまう。こうして山岳修行の中心地熊野を押さえていた園城寺が，顕密に加え「修験」を標榜していったと捉える。

第四章「巫女と験者―憑祈禱における神仏習合―」では，仏教者による憑祈禱の実態とその変化を解明しようとしている。憑祈禱という言葉は主に民俗学の分野において用いられ，呪術者が第三者，ヨリマシに対し霊を憑依させる現象全般を指している。仏教者が行う憑祈禱による治療は10世紀末からみられるが，これは主にモノノケに起因する病の治療として行われるものであり，託宣に代表される神事の憑祈禱とは別系統に属する。この祈禱方法が確立した当初，呪術者は密教僧が，ヨリマシは被治療者に仕える子女が担当した。

12世紀に入ると，ヨリマシを巫女が務める「物付」という専門的存在が現れるが，それにともなって仏教的な憑祈禱に変化が生じてくる。一つは呪術者である山伏とのペアによる活動である。これは近世に確認できる山伏と巫女夫婦に繋がるものとみられ，早ければ14世紀初頭以前，遅くとも同世紀後半にはこの形態が成立する。もう一つは巫女の主導により憑依が

行われるケースが現れたことである。本来の仏教的憑祈禱においては，真言が憑依を引き起こす呪文として唱えられていたのに対し，この場合は神の名などを唱える，従来託宣の場において行われていたような呪文が用いられた。このような仏教的起源をもつ憑祈禱と神事の憑祈禱の混淆は，12世紀以降に展開したものとみられるが，それを推し進めたのは山岳修行者，すなわち山伏であった。論者はこの変化を，修行の場山岳において形成されていた神仏習合的な信仰が，俗社会における呪術の場にも浸透してきたものと位置づけている。

第五章「修験道当山派と興福寺堂衆」は，興福寺の行人層・堂衆との関係から，従来不明瞭であった修験道「当山派」の成立とその展開を考察したものである。まず，興福寺「当山派」史料が南北朝期の実態にもとづくことを指摘し，摂津勝尾寺の史料と照合して当時の組織形態を究明している。当該期の「当山派」は大峰・葛城山系で修行し，葛城北部の二上山で入峰成就を祝う行事を行った。こうした行事を通じて，興福寺をはじめとする南都堂衆と畿内近国寺院の山伏・行人層が結合し，山麓の当麻寺等の3寺は二上山管理者として組織中枢に位置した。また興福寺堂衆が統率する大和国先達組織もこの派に含まれていた。

「当山派」は鎌倉後期には成立していたが，その成立には組織を主導した興福寺堂衆の動向が深く関わっていた。興福寺をはじめとする南都堂衆は古義律宗を修めて受戒会を主掌し，南都寺院社会において不可欠な地位を占めていたが，院政・鎌倉前期の戒律復興運動は堂衆にも影響を与え，彼らなりの律学振興として，古義律宗の一環であった寺内の修験修行「当行」やその発展形である大峰修験に励んでいく。これが推進力となって，彼らは興福寺末寺・畿内近国寺院と大峰入峰を通じて結びつき，修験組織が形成された。しかし南北朝後期以降，興福寺堂衆は律蔵修学の傾向を強め，大峰修験との関係を弱めていく。一方，末寺等の行人層は出自身分たる有力百姓層の勢力伸長を反映し寺内で権限を拡張したが，学侶と対峙する際の宗教的拠り所として大峰修験に励み，修験組織への関与を強めた。こうして南北朝内乱期以降，聖護院の本山派組織編成の影響も受け，「当山派」の修験組織も変容していったと主張する。

論文審査の結果の要旨

修験道史の研究は，1970年代から80年代にかけて五来重・宮家準の両氏を中心に，仏教民俗学や宗教社会学の立場から活発に行われ，今日の修験道成立に関する通説が形成された。たとえば宮家氏によれば，修験道は日本古来の山岳信仰が外来諸宗教の影響のもとに「成立宗教」の形をとるに至ったもので，その成立時期は熊野・金峯山などの山岳において宗教機構が整備され，修験集団が形成される平安時代末期である，という。そして現在では，この宮家氏の見解が通説の位置を占めている。これに対し論者は，こうした通説のもとになっている両氏の研究を，①両氏とも修験道の本質を近世以降の実態から導きだし，それにもとづいて古代・中世の現象を解釈している，②平安末期にはまだ「修験道」という宗派は確認できない，などの問題点があると批判する。そのうえで論者は，修験道の成立は古代・中世の政治・社会・文化との関係から歴史的に捉えるべきであると主張し，修験道という顕密体制の一翼を担う宗派が成立する過程を考察している。

本論は5つの章からなるが，その前後に研究史を踏まえて課題を提示した序章と，成果をまとめた終章が配され，五章には「当山派」に関する新出史料を紹介した補論が付されている。

山岳修行と呪術活動のそれぞれの展開から修験道の成立過程を追究した本論文の成果は，大きく4つにまとめられる。まず第一に，修験道の成立過程における13世紀末の意義を明確にしたことである。論者は，この時期を宗派としての修験道が成立する画期とみなし，二つの側面からこの問題に迫っている。一つは熊野の側からである。金峯山と熊野の間に連なる大峰山系で山岳修行が活発化するにともない，聖地の名を高めてきた熊野は，寛治4年（1090）の白河院の参詣により，王権の保証をえて山岳修行界における権威を確立し，その後も勢力を拡大していく。承久の乱はこの王権との結びつきに打撃を与えることになるが，論者は，その関係を回復しようとする過程で，熊野の側から山岳修行を王権守護の営みと位置づける主張がなされ，それが「修験之道」の成立に結実したと捉えている（第一章）。

今一つは，熊野に君臨した三山検校の動向からである。三山検校には通常，呪術能力をもった験者（後述）が補任された。本来，験者としての能力を獲得するためには必ずしも山岳修行を要しなかったが，次第にそれを重視する傾向が強まり，13世紀半ばには貴族社会の験者はほぼ寺門派の山岳修行者によって占められるようになる。それにともない，これ以降，寺門派が三山検校を独占し，その地位は常住院門跡に師資相承されていく。論者は，園城寺が「顕・密・修験」の三つを兼帯す

る自宗の優越性を喧伝し始め，「修験」が独立した宗派をさすようになる背景に，こうした寺門派による三山検校の独占があったと主張している（第三章）。13世紀末は修験道の研究史のなかで早くから注目されていた時期であるが，様々な現象を整理し，修験道が宗派として成立する画期であることを明確にした点は，研究を一歩前進させるものである。

第二に，験者の語義，およびその特性を明らかにしたことである。通説では，験者は修験者の前身的な存在であり，彼らの行う活発な山岳修行が修験道の成立を促したとされる。平安～鎌倉時代の用例を検討した論者は，こうした理解を否定し，この語は呪を用いた治療である加持治療が広まる10世紀半ばから使用されること，および験者とは山岳修行と験力を表裏一体の属性とする存在ではなく，加持治療の能力をもつものをさしていたことを論証している。さらにその変化を追い，もともと験者は山岳修行を必須としていなかったが，鎌倉後期にはそれが不可欠なものになり，験者が修験者に限られるようになる事態が生じると捉えている（第二章）。

第三に，仏教的な憑祈禱の歴史的変遷を究明したことである。仏教者が行う憑祈禱（呪術者がヨリマシに霊を憑依させる現象全般をさす）による治療は10世紀末からみられるが，当初は密教僧が被治療者に仕える子女をヨリマシに用いて，これを行った。12世紀にはいると，巫女がヨリマシを務める「物付」という専門的存在が現れ，それにともなって，仏教的な憑祈禱に変化が生じる。一つは，呪術者である山伏とのペアによる活動であり，このタイプは近世にみられる山伏と巫女夫婦につながっていく。もう一つは，巫女の主導により憑依の行われるケースが現れたことで，この場合には呪文として，真言に代わって神名が唱えられたとみられる。論者は，こうした憑祈禱における仏事と神事の混淆を推し進めたのは山伏であり，修行の場，山岳における神仏習合的信仰が俗社会における呪術の場にも浸透してきたものと主張している（第四章）。験者の特質を明確にした二点目とともに，修験道史ばかりでなく，仏教史にも関わる基礎的な成果である。

そして第四に，鎌倉後期～南北朝期における「当山派」の実態，とくにその中心をなした興福寺堂衆の動向を解明したことである。南北朝期，「当山派」は大峰・葛城山系で修行し，葛城北部の二上山で入峰成就を祝う行事を行ったが，こうした行事を通じて，興福寺をはじめとする南都堂衆と畿内近国寺院の山伏・行人層が結合し，「当山派」の組織ができあがっていた。「当山派」の成立は鎌倉後期まで遡るが，その成立には興福寺堂衆の動向が深い関わりをもっている。そのきっかけをなしたのは，院政・鎌倉前期の戒律復興運動であった。この動きは堂衆にも大きな影響を与え，彼らなりの律学復興として，古義律宗修学の一環であった寺内の修験修行「当行」やその発展形である大峰修験に励んでいく。論者は，この律学復興を契機にして，堂衆らが興福寺末寺や畿内近国寺院の寺僧らと大峰入峰を通じて結びつき，修験組織（「当山派」）が形成されたと捉えている。修験道史のなかで，鎌倉後期～南北朝期の「当山派」の実態はこれまで空白となっていただけに，研究史上大きな意味を有する成果である。

論者は，修験道関係の史料にとどまらず，広く貴族の日記や顕密寺院の文書など，一般の歴史学の対象となっている史料を多くとりあげ，同時代史料から実態を掘りおこすことを通じて，これまでの遡及的方法にもとづく修験道像の修正を図っている。得られた成果も多岐にわたっており，修験道史にとどまらず，寺院史や社会史にも少なからず影響を与えるものである。とはいえ，望まれる点もいくつかみられる。宗派として修験道を捉えるべきであると主張する根拠が十分な形で提示されていない，これまで成立期とみなされていた平安末期の位置づけが必ずしも明確でない，などである。また論述にあたり，論理的な整理が不十分な箇所も散見する。しかしこれらも今後の課題とみなすべきであり，博士論文としての価値を大きく損なうものではない。

以上，審査したところにより，本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2002年７月12日，調査委員３名が論文内容とそれに関連した事がらについて口頭試問を行った結果，合格と認めた。